令和六年度一般選抜（Ⅰ期）問題　国語

埼玉医科大学短期大学

注意事項

一　解答は別紙答案用紙に書くこと。

二　解答を書く前に必ず受験番号・氏名を書くこと。

問題用紙四枚

答案用紙一枚

無断転載・複製を禁ず

令和六年度一般選抜（Ⅰ期）問題　国語

埼玉医科大学短期大学

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 日常生活での〈手段と目的とのつながり〉について述べた際に、ときとして将来の目的によって人はがんじがらめになりうることを確認しました。(1)そうなると、そもそも生きていくことが苦しくなりかねないことも。何かの試験への準備をしている人なら、自分をまるでGPSの航法システムが搭載された巡航ミサイルのように、自らの現在位置を把握しながら目標到達のために方向を(a)逐次調整していくでしょう。

2 そういう行動をとっているとき、人はそれこそミサイルのようなモノになっているのかもしれません。自然法則に則ってモノが動くように、人間がデータ収集とデータ処理の機械的なシステム、つまりメカニズムにはまりきっているとも言えるでしょう。そこでは、人間も精確に動くかもしれません。進みつつ、適当な時間間隔で目分はどの位置にいるのかという情報を取得し、それを行動に戻して制御できているのですから。もし人間が自分自身を機械と同化するというか、自分を機械的なものと同一視したあり方にとどまるならば、確かに、目標には見事に到達するかもしれません。けれども、(2)そこでミサイルのように自らも破壊されるとしたら・・・・・・。

3 自然法則があるかぎり、（　A　）的に動く部分は人間にもあるでしょう。それでも〈人の「生命」とはそんなものなのか？〉と問うたりはしませんか。人生が、巡航ミサイルの航路のように目標とそれへの到達のためのプログラムに従って(b)ゴサを修正するフィードバッグ制御の下に展開するだけのものだとしたら、そこでは人間の到達しうる高度な生命活動としての精神活動など消えてしまうのではないでしょうか。なぜなら、いま述べたようなフィードバック制御というのは、どんなに微調整をするものだとしても、ある閉じたシステムのなかでの繰り返しが行われるだけだからです。おそらく、そこに新たなものの創造はありません。到達目標は事前にわかりきっているのですから。

4 このことを逆から言えば次のように問うことも可能でしょう。もし高度とも言えるような人間の精神活動や、人間にも可能な創造といったものを語るとしたら、どういうふうにしてだろうか、と。実はここにこそ、〈言葉のつながり（あり方）〉について「生命」や「創造」を語る機縁が生じてくるのです。単なる同じことの繰り返しや（　①　）巡りになったとき、そこでは(3)言葉の生命が消えてしまうのではないかと問うてみたいのです。

5 言葉の生命が(c)コカツした文章の典型はお役所的・（　B　）的な文書だと断言できます。そこにあるのはほとんどの場合、前例に則ることしかしない文体なのですから。新たに文章を作成する場合であっても、その文章は上意（　②　）であり、有職（　③　）に基づく、つまり自分が決めたのではなく、また自分は責任など取りたくない類のものです。過去にすでにあったことを繰り返すにすぎません。悪い意味で、徹底して（　C　）的です。これまでにそうであったことを知っている（憶えている）という意味では、そういう文書作成者も知識は豊富かもしれません。コンピュータが定型文を記憶装置に保持していて読み出せる程度のものですが。そんなとき、執筆活動もその文書作成者もいわば精神的にはもう死んでいると言っても過言ではありません。（　X　）生物としては見事に生きています。ちょうど、進化の袋小路に陥って本能に身をまかせ、同じことを操り返すようになってはいても生物が生存を維持できているようにです。

6 あなたにだって(4)そういう場合がありうるのを知っていますか。たとえば怒って誰かと言い合いをしているときです。そんなとき、自分のほうが正しいことを(d)微塵も疑わず、つまり信じ込んで、自分の主張をマシンガンのように繰り返し発しては いませんか。そのときも確かに言葉を使っているけれども、〈見事に言葉を使ってこそ成しとげうる哲学的思考〉とでも言うべき高度な精神活動は、実際には飛び去っています。なぜなら、あなたはもうマシンになってしまっているのですから。言葉を発しているという意味では頭を使っているのでしょうが、その働き方は「売り言葉に（　④　）言葉」というような、ほとんど刺激に対する（　D　）的・機械的な反応でしかありません。物体が壁にぶつかれば（　E　）的に跳ね返るのと同じで、（　F　）的ではないとさえ言えます。

無断転載・複製を禁ず

7 そうなってしまえば言葉に見事な精神活動がこもることはありません。心のこもった言葉など一つも出てきません。怒りという情念のレベルにまで、あなたのあり方が落下してしまっているのです。こうした場面では言葉そのものが硬い弾丸のようにモノになっています。人間が(e)ガンコになってしまっているのに応じて、言葉が凝固しているのです。人が何かを信じ込んでしまうとき、往々にしてそういう態度が生じてくるのはわかりますよね。

（米山優『つながりの哲学的思考』より一部改変）

問一　傍線部（a）～（e）の漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

問二　空欄AからFに入る適語はどれか、それぞれ次の中から選んで記号で答えよ。

ア　保守　　イ　意志　　ウ　必然　　エ　自動　　オ　機械　　カ　官僚

問三　空欄①～④に入る二字をそれぞれ答えよ。

問四　空欄Xに入る適語はどれか、次の中から選んで記号で答えよ。

ア　そして　　イ　しかし　　ウ　むしろ　　エ　もちろん

問五　傍線部（1）「そうなると、そもそも生きていくことが苦しくなりかねないことも」とあるが、何故か。次の説明文の空欄①・②に本文中より言葉を補って完成せよ。ただし①は2段落の六字、②は3段落の四字。

「人が（　①　）しまい、（　②　）が失われてしまうから」

問六　傍線部（2）「そこでミサイルのように自らも破壊される」とあるが、それはどういうことの比喩表現か。本文5段落より十二字で書き抜き、その最初の五字で示せ。

問七　傍線部（3）「言葉の生命」と筆者が考えているものを、この段落より前の本文から八字で書き抜け。

問八　傍線部（4）「そういう場合」とあるが、まとめるとどういう「場合」か。3段落から二十字程度で書き抜き、その最初の三字で示せ。

問九　本文を内容的に二段落に分けると、二段落はどこからか。段落番号で答えよ。

問十　本文の内容と最も合致するものはどれか、次の中から選んで記号で答えよ。

ア　進みつつ、適当な時間間隔で目分はどの位置にいるのかという情報を取得し、それを行動に戻して制御することが、人間の精神活動にとっては大切である。

イ　高度とも言えるような人間の精神活動や人間にも可能な創造といったものを語るとしたら、本能に基づいて行動することが大切である。

無断転載・複製を禁ず

ウ　生物として見事に生きるためには、閉じられたシステムの中で、高度な精神活動である創造を、維持し続けることが大切である。

エ　見事に言葉を使ってこそ成しとげうる高度な精神活動が、可能になるためには、前例にとらわれない自分自身による思考が大切である。

オ　人が何かを信じ込んでしまうとき、往々にして言葉が凝固になっているので、その言葉を基に、高度な精神活動を開始することが大切である。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 私の成長（あるいは認識の変化）は、「死」を（a）ケイキとした（1）父との決定的な断絶がもたらしてくれたともいえる。（　A　）、その断絶は苦しいものであるし、「悲しい断絶だけど、でも〇〇をもたらしてくれたので意味があった」というわけでもない。この断絶は、他のいかなる断絶とも異なり、そして何かを得られるような道具的な機会でもないし、目的論的な意味などもない、教訓や意味づけなどに（b）カンゲンできない、唯一性をもった決的な別れであった。この世で唯一の、一回限りの断絶では、たとえそこで何を得ようとも、（2）泣くしかないのである。

2 世の中にはそうした唯一（B）二の断絶がたくさんあるはずだが、日常においてはついそれを忘れがちとなり、同じことの繰り返しという意識のもと、感受性が鈍麻していることもある。たとえ、「でもいろいろ知ることができたよ」とか「勉強させてもらった」とか「私、他の人よりもいろんな経験をしているから」というようにそれら断絶の繰り返しの有意義性について語るとしても、それが本当にかけがえのないものであるならば、それは一回限りの何かしか教えないはずである。

3 私にとっての父が特別かつ唯一のもので、同種類の断絶がこの世にたくさんあろうと父の死が決定的な仕方で私を途方に暮れさせたように、（3）有意義性について語ることができるような断絶とはそうした決定的なものだったのだろうか。もしそうではないとしたら（そうではないからこそ）、そのように語る人たちは何かの教えや作法を必要とはしないだろうし、これからも必要とすることはないだろう。彼ら・彼女らは自分ではどうしようもない状況の下で無力さの前に立ち尽くすことなどなく、次にまた自分でコントロールできる（と思い込んでいる）断絶を内包した人間関係を自由に選び、そして有象無（C）の別れを繰り返し続けるだろう。そのなかで、いろんな（　D　）的に役に立つことを学んではゆくのかもしれないが（恋愛の方法論や、上手な別れ方など）、決定的な寂しさ・侘しさを得ることのないまま（あるいはそれに目を背けて）そのまま人生を過ごしてゆくとしたら、（4）自分だけしかそれを理解しえない一回限りの「感動」「悲しみ」「もののあはれ」というものが（c）綴られた「自分だけしか味わえない人生」をそこに描けているようには思えない。

4 この世には、かけがえのない出会いと別れ、そして、かけがえのない学びが確かにある。この世界がありきたりであるのは、出会ったものをありきたりなものとして取り扱うその人が（　E　）を見失った生き方をしているからであって、そんな世界は、そうした人たち同士が「どっちがより幸せか」「どっちがいろんな経験をしているか」「誰の生き方が一番憧れるものなのか」と比較しあったり競争することで人生の意義を決めようとするようなアリーナ（競技場）でしかない。自分だけの景色を手に入れたいのであれば、そのアリーナを飛び出して、社会的評価や世間からの評判に惑わされることなく、目の前のかけがえのなさと向き合おうとする一人きりの真摯さのもとで生きるしかない。

5 おそらく真の自由とは、かけがえのないものと向き合い続けることを自分で決めるまさにその在り方にあるように思われる。損得考えず、限られた時間を目の前のその人と、あるいは目の前のそのこととただ向き合うような素朴で愚直な生き方にだって自由はあるのだ。そうした自由のもと、人は何かを信じ、その信念のもと目の前の物事を大切にしつつ、それを積み重ね、自分の人生を生きてゆく。

6 逆に、通り過ぎたかけがえのないもの、目の前にある唯一限りのものを（d）カショウ評価し、「こんなものじゃなく、もっとよいものを……」と求めるその態度は、我欲にとらわれ熱に浮かされた不（　F　）な状態であって、そこには信念も思想もありはしない。そんな人に欠落しているものこそ、まさにその瞬間瞬間に集中するための「行」としての生き方なのである。

7 こうした説教に対し、「結局は他人の人生なんだから、どうでもいいじゃないか」という意見もあるだろう。たしかにそうである。しかし、私のかけがえのない人生において私自身が実践していることは、限られた時間のなか研究したり経験したことをも

無断転載・複製を禁ず

とにそれを論じることである。大事だと思っていることを論じられるときに論じ、もしかすると影響を与えるかもしれない人に少しでも感じ取ってもらえるよう、書くべきことを書き伝えようとすることは、私にとっての行にほかならない。そして、この行は祈りでもある。私だけにしかそれに(e)殉じる意義などないこの行ではあるが、(5)それが誰かに届き、その誰かの心に光明がさしてその一回限りの生を豊かにできるというのであれば、それは断絶を超えた「奇跡」であり、私の「生」に私だけの色を与えてくれる喜びでもある。

（中村隆文『世界がわかる比較思想入門』より一部改変）

問一　傍線部（a）～（e）の漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字にせよ。

問二　空欄Aに入る適語と思われるものはどれか、次の中から選んで記号で答えよ。

ア　なぜなら　　イ　しかし　　ウ　たとえば　　エ　もちろん　　オ　そして

問三　空欄B・Cに入る漢字一字を答よ。

問四　空欄Dに入る適語と思われるものはどれか、次の中から選んで記号で答えよ。

ア　具体　　イ　方法　　ウ　世俗　　エ　体験

問五　空欄E・Fに入る適語を、本文より示せ。Eは三字、Fは二字。

問六　傍線部(1)「父との決定的断な断絶がもたらしてくれた」とあるが、それは何の重要性と考えられるか。[5]段落より、九字で書き抜け。

問七　傍線部(2)「泣くしかないのである」とあるが、同じ状態を表している表現を[3]段落より、十三字で書き抜き最初の五字示せ。

問八　傍線部（3）「有意義性について語ることができるような断絶」とあるが、それと反対のものをこの段落より前の本文中より、十字程度で書き抜き、最初の五字で示せ。

問九　傍線部（4）『自分だけしかそれを理解しえない一回限りの「感動」「悲しみ」「もののあはれ」というもの』とあるが、その比喩表現を二つ、この段落より後の本文から示せ。

問十　傍線部(5)「それが誰かに届き、その誰かの心に光明がさしてその一回限りの生を豊かにできる」とあるが、それは筆者にとって何か。本文の二字で示せ。

無断転載・複製を禁ず